

# CMの事例から学ぶ！ メディアが発する女性像・男性像



■日時：2020年1月11日(土)午後1時30分～3時30分  
■講師：田中東子さん(大妻女子大学文学部教授および  
東京大学大学院情報学府客員教授)

私たちの身近な素材である広告を題材に、ジェンダーや性差別の問題を考えると？

様々な動画やポスターを交えて、田中さんにお話ししていただきました。

## ●「炎上」する広告

世界経済フォーラムが発表した2019年の「ジェンダー・ギャップ指数」で153か国中121位となった日本。女性のライフスタイルが変化しても男性のライフスタイルはあまり変わらず、テレビCMの中には旧態依然のものが数多く存在しました。

しかし昨今、そうしたCMが改善されてきており、その背景にあるのがSNSにおける広告の炎上です。

炎上する広告には、性役割を強調する、女性を商品化する、アダルトビデオの手法を盛り込んでいるといった特徴があり、民間企業だけでなく、自治体や大学など公共性の高い組織もそのような動画やポスターを制作してしまっています。

## 参加者の声

- 日本と海外のCMを比べて見られて、日本のジェンダー意識の低さが改めてわかった。
- 女性を応援するつもりなのに、見ていると苦しくなってしまう…CMは難しいものですね。



## ● SNS 時代のジェンダーとメディア

炎上の背景には、アナログからデジタルへというメディア環境の変化があります。

それにより、企業CMやPR動画に対する多くの女性たちからの批判が、SNSを通じて炎上という形で顕在化されるというプラスの面がある一方、オンライン上での女性蔑視的な発言やアダルト広告の蔓延など、マイナスの現象も起こっています。

## ● 状況を改善するには

CMが発する性別役割分業の再生産や性の商品化など、問題の焦点が何なのかということに気づく。また、性別に関するステレオタイプの広告を禁止するといった海外の取組から学ぶなどの方法があります。

そして、人々が様々な観点から映像やイメージを見ている現在、送り手の想いや意図が伝わらないこともありうるという前提で発信していくことが求められています。

- ※ジェンダー…社会的・文化的に構築された性
- ※炎上…インターネットに不適切にアップロードされた記事・写真・コメントなどに対して、制御不能な規模での非難、中傷、批判のコメントが殺到する状態
- ※ジェンダー・ギャップ指数…スイスの民間研究機関「世界経済フォーラム」が、政治、経済、教育、健康の4分野における男女間の格差を毎年発表。日本は特に女性の政治参画が遅れており、2019年版では過去最低。先進国では最低水準

## はばたき21情報コーナーおすすめ図書案内

女性・スポーツ大事典  
子どもから大人まで課題解決に役立つ  
エレン・スタウロウスキー編著  
井上則子/山田ゆかり 監訳  
西村書店



女性がスポーツとどう関わってきたか、その経緯や障壁とメリット、メディア、リーダーシップ、ビジネス等の諸問題について考察する。

日本の天井  
時代を変えた「第一号」の女たち  
石井 妙子著  
角川書店



女性が組織や社会の中で立場や地位を求めても、それらを阻止しようとするガラスの天井。強固なものとして存在した日本の天井を打ち破り、各界の「第一号」として道をつくってきた女性たちの姿。

「レンアイ、基本のキ」  
好きになったらなんでもOK?  
打越 さく良著  
岩波ジュニア新書



好きになったら束縛するのも前なのだろうか。不幸せな関係に陥らないために、事例をあげながら、恋愛のなかの暴力やその対処法について解説。

# Q どうする？ 家庭での性教育

## 「デートDV/ 対等な関係」



講座でお話する櫻井裕子さん

昨年11月、生涯学習センターで中学校PTA対象の人権尊重教育研修会が開かれました。デートDVについてよくわからない、親はどのように伝えていく必要があるかを、助産師・思春期保健相談士の櫻井裕子さんにお話ししていただきました。櫻井さん自身の体験談や保健相談の事例のほか、クイズ形式の性教育もあり、とてもインパクトのある研修会でした。

## デートDVとは？

デートDVとは、付き合っている相手・恋人からの暴力をいいます。暴力には、身体的、精神的、経済的、性的、社会的暴力があります。

ラブラブ期、イライラ期、バクハツ期という暴力のサイクルにより、暴力を受けた側は自分の価値観を奪われてしまいます。そして、自尊心を失った時、急に優しくされると、自分の価値を認めてくれる唯一の人と思いついてしまいます。そうして、やる方もやられる方もわからなくなってしまうのです。そのため対等な関係が望ましいという知識があっても、暴力を受けていることに気づかないことがあります。

こうしたデートDVに関して、櫻井さんは、「知識だけでなく自分の事として考えてほしい」と言います。

## 性教育は人権教育とセクシャル리티の平等

櫻井さんの話によると、「日本の性教育は世界と比べ、伝えられていないことが多い現状がある」と言います。

## 知識を身につける機会が少ない

男性はアダルトビデオを教科書にしてしまっています。日本のアダルトビデオの多くに暴力的なシーンが含まれているため、相手の気持ちを大切にしない行為になってしまっています。安心安全な環境、対等な関係、同意が得られた場での性的行為は生まれ、究極のコミュニケーションになるのです。

世界では、ユネスコが作成した『交際セクシュアリティ教育ガイド』を元に、年齢別に価値観や関係性の構築を踏まえた教育が行われています。

## NOが言える自己肯定感を高める

では、どのように親は働きかければよいのでしょうか。

「性犯罪者の多くは『嫌がるそぶりではなかった』と言いますが、体の自己決定をすることを同意とい、同意することが必要です。『いやいやよも 好きのうち』ではなく、『いやいやよは マジで嫌』と言えるようになることが大切です。すぐにYESと言わないとき、相手は同意していない事を知っておく必要があります。」

また、子供の自己肯定感を高めることが大切だと櫻井さんはおっしゃいます。

「自己肯定感は、基本的自己肯定感と社会的自己肯定感の2層で成り立っており、褒めることは社会的自己肯定感にあたります。基本的自己肯定感は、家庭でテレビなどを一緒にみて共に過ごすこと、体験を共有する・共感しあうことで高まります。そのような場を家庭で作ってほしい。自己肯定感が高い子供はNOが言え、SOSを伝えられるのです。」

最後に、保健相談の中学3年生の妊娠出産の事例で、「本人から『私は男に抱かれたかったわけじゃない。誰かに『愛している』と言って欲しかっただけ。そして、本心にそれをして欲しかったのは、お母さんだった』と言われた』という、とても印象に残るお話を伺いました。



デートDV防止啓発冊子  
はばたき21で配布。  
区公式HPに掲載。